

再読 こんな時 こんな本

北陸新幹線の開業まで1週間。春休みやゴルデンウィークに北陸へ出かけようと考えている方もいるでしょう。行く前に少しでも北陸のことを知つておけば、名所や料理、名産品の見え方もぐっと変わってくるはずです。

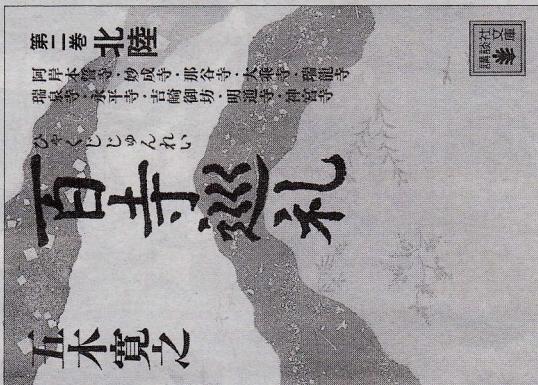
寺院や食の歴史に触れる

太平洋側から見ると日本アルプスの「向こう側」にあたる北陸が、東京から近くなる。最近はやたらと金沢がフリーチャーされていて、北陸出身の記者には何か不思議な感じだ。北陸へ行かれる方、どうぞ富山や能登、福井にも足を延ばしてください。

矢部さんがあます薦めるのが①『百寺巡礼 第二巻 北陸』。仏教に造詣が

深い著者による、全10巻のベストセラーシリーズ。第一巻の「奈良」の次が「北陸」なのは、五木氏が新人時代を過ごした金沢、北陸に深い思い入れがあるからだという。

大きなかやぶき屋根の本堂を持つ能登の淨土真宗寺院・阿岸本尊寺や、岩山と洞窟で知られる小松の那倉寺、道元が福井に開いた曹洞宗大本山の永平



① 五木寛之著、2003年（講談社文庫、税込み607円）



② 向笠千恵子著、2010年（平凡社新書、886円）

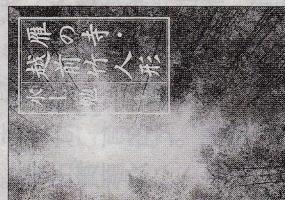


③ 奥野良之助著、1995年（平凡社ライブラリー、1512円）

本をプレゼント

◆紹介した本を各1冊、計4人に差し上げます。住所・氏名と書名を記し、はがきで「再読」係へ。差し上げます。発送をもつて発表といきました。ブック・アサヒ・コム (<http://book.asahi.com/saidoku/>) から購入できます。

←記者のお薦め



④ 水上勉著、1963年（新潮文庫、594円）

寺など10の寺を紹介している。史実と仏教の知識に、豊かな想像も加えた文章は読みやすい。「北陸を旅してのエッセイの趣で、旅行ガイドとしても楽しめます」と矢部さん。

②『食の街道を行く』は、料理本のアカデミー賞と言われるグルマン世界料理本大賞を受賞した名著。「さまざまな食品、食材、調味料が伝わる道筋をたどる、おいしく楽しい一冊です」（矢部さん）。北陸といえば海の幸、山の幸などで、北陸ではサバやブリ、昆布が取り上げられている。

たとえば富山・氷見から飛騨へと延びる「ぶり街道」。著者がそのルートをたどりながら様々なアリ料理を食していくのだが、「脂のりの極まった刺身には舌を清めてくれる地酒『立山』がぴったり」などといふ活字の食レポを読むと、やはり現地へ食べに行きたくなる。

矢部さんのいち押しは③『金沢城のヒキガエル』。金沢大学が金沢城内にあつた頃、理学部生物学科の教員として赴任した著者は、城内の池に暮らすヒキガエル1526匹を追跡調査した。その模様を伝える黒色のドキュメンタリーは、「先生の書き方がユーモアたっぷりで、思わず噴き出すおかしさ」（矢部さん）なのだ。

副題が「競争なき社会に生きる」。淘汰されると思われた3本足の「彼」が、ヒキガエル社会の中で8年間も生きたことが明らかになり、人間社会のありように疑問を投げかける。

記者のお薦めは④『雁の寺・越前竹人形』収録の「越前竹人形」。山あいの雪深い集落を舞台にした竹細工師2代の物語。芦原温泉の美しい娘姫・玉枝に亡き母を重ねた喜助は、玉枝を嫁に迎える。「母」に対する特殊な感情が、悲劇へつながっていく。

北陸の作家といえば金沢の文豪が有名だが、福井出身の水上勉の世界もぜひ。（吉川一樹）